その名ぞ我らが誇り

江羅寿夫会長の三中生徒時代

京三中・山城高同窓会長、江羅寿夫さんのお人柄を一言でいえば、篤実な人となる。

江羅会長を兄と慕う同窓会員は多い。

それらの人々から、江羅さんはどのような生徒だったか、同窓会報に載せて欲しいというリクエストに応えるため、高林さんと二人で江羅さんのお宅を訪ねた。

予め取材の内容は伝えてあったので、江羅さんは私達を応接間に請じ入れるとすぐ

「このようにまとめておきました」

と何枚かのメモを見せられた。

そこには私達の聞きたいことがすべて書かれてあった。

何という行き届いたお方だろうと私達は感心した。

以下そのメモに沿って江羅さんの生徒時代を紹介する。

江羅さんが山城高の前身、京都府立京都第三中学校に入学されたのは昭和十一年である。

江羅さんが難関を突破して三中に合格された時、お家の人

は、入学を喜ぶ前に、

「三中は立派な学校です。三中の生徒として恥ずかしくない人間にならねばなりません」

と懇々とさとされた。

三中の校歌の一節に、

「おお三中、その名ぞわれらが誇り」という言葉がある。

江羅さんは家の人の言葉、校歌の歌詞を胸に刻み、そのとおりの生徒生活を送った。

一年生の夏休みに三重県津市阿漕が浦の観海流水練の合宿に参加した。合宿の最後に一里半(六キロメートル)三里(十二キロメートル)五里(二十キロメートル)の遠泳があり、江羅さんは同級の山本英太郎さんと一里半の遠泳に挑戦、みごと完泳、観海流の免許をとった。

舟にあがって、もらったあのあめ湯のうまかったこと、と江羅さんは笑った。

合宿の夜、スリリングな経験をした。

寺の本堂で蚊帳を吊って寝ていた時、盗人が侵入してきたのである。生徒の枕の下へ手を入れ財布を探していた。腕っぷしの強い豪傑肌の江羅さんだが、まだ十二歳の子供だった。ジッと息を殺して泥棒の好きにさせていた。泥棒は、便所へ

行くために起きてきた大井先生（柔道部長）と鉢合わせた。エイヤと庭先へ投げ飛ばされ、そのまま一目散に逃亡した。

三年になると比叡山山頂への競歩、比叡山山頂での兎狩りが行われたが、兎が捕まったという話は聞いたことがなかった。

江羅さんの家は円町にあった。体が強く敏捷な江羅さんは登校時刻を知らせる鐘がなってから駆け付けても授業に間に合った。但し馬代通りのカラタチの木の垣根のすき間から教室へとびこむという離れ技を演じなければならなかった。ある日、教練の教官、五十嵐先生（退役陸軍曹長）に見つかり、罰として帽子をとられた。藤森校長のところへ詫びに行き、やっと帽子を返してもらった。

五十嵐先生は私もよく知っている。厳しいだけでなく、どこか茫洋なところがあり、生徒の人気者だった。

昭和十二年七月七日、蘆溝橋事件が勃発し、昭和十四年になると京都師団から、軍事教練を命じられた通りしているかのお目付役に配属将校がやって来て、牧歌的だった三中もだんだん息苦しくなってきた。

江羅さんは昭和十五年に卒業した。その翌年の昭和十六年十二月八日、ハワイ真珠湾攻撃で太平洋戦争へと突入していった。

江羅さんが三中に合格した時、家の人が、

「三中生に恥じない人間になれ」
と励ましたことは先述した。
三中の校歌は誠実に生きることを謳っている。
江羅寿夫さんの八十有余年の人生を一言でいえば、〝誠実〟の一語に尽きる。
京都市会議員になり、市のために誠を尽くし、連続十一回当選、市会議長、京都府人権擁護委員会会長にも就任、平成十年十一月三日には勲三等旭日中綬章に輝いた。
友を裏切らない江羅さんには当然のことながら協力の実を惜しまない友人が多い。
中でも三中同期生の野村隆一氏（京都市交通局長、収入役、同窓会百年誌編集長）、森田久男氏（観光局長、仏大教授）、山本英太郎氏（32回年度委員）、東京では防衛庁で調達本部長を務めた竹岡勝美がいる。竹岡氏は三中山城同窓会の東京支部長でもある。
リーダーシップとは、俺についてこい！ではなく、この人のために何か役に立ちたいと思わせることである。
江羅さんはその意味ではまさにリーダーにふさわしい人物である。
創立百年の同窓会長にいい人を得た、本稿を取材した高林氏、私の、共通した思いである。